

京都丹波にメキシコ・オリンピックで得点王となり銅メダルを取った元サッカーの名選手がオーナーをするゴルフ場があり、弊社のシステムを導入することになった。そこから日本海に出ると舞鶴や宮津などの港があり、日本三景の天橋立も近くにある。その日、私は迷わず宮津に宿をとった。

舞鶴港は佐世保、横須賀とならぶ日本海軍の主要な基地であった。昭和十四年春、霞ヶ浦で飛行訓練を終了した海兵六十六期の同期生十二名(新井、石井、鮫島、西野、中馬、西村、村上、村山、山本、梶原、湯池、和田)はこの港を母港とする最新鋭の巡洋艦利根の乗組配備となり日本海軍の軍人としてスタートを切っていた。

「宮津の料理屋に中馬と財布を一緒にして預けてよく飲んだ」と話す父の言葉には、国のために死ぬ覚悟の人間にとってお金は二の次だったという意味が含まれていた。彼らはいずれアメリカと戦うことになるだろうと予想していた、その戦いで死ぬ覚悟も既に出ていた。十七年五月、特殊潜航艇でシドニー湾を攻撃した中馬兼四は文字通り兵器の一部となって散り軍神として祀られる。不運にも発病し、ご奉公できずに帰還した父は自分が戦えずに生きていることを永く苦しむのである。

ホテルの窓に夕日が差し込み、日本海の港町に静かな晩秋の夜がやってきた。

六十九年前、こんな静かな夜にどこか宮津のどこかの料理屋(ホワイト亭とか)で壮行会が開かれ、同期生たちは大いに飲みそれぞれの健闘を誓いあったのだろう。

荒れる冬の台湾海峡を渡り鳥のように南下し、ベトナムに近い海南島を基地にして南海封鎖作戦に従事した者、特殊潜航艇に乗り組み秘密の訓練に明け暮れた者、予想される空母同士の決戦を想定し飛行爆撃訓練に磨きをかける者などに分かれた。

十二名の仲間の内、七名が生きて終戦を迎えることが出来ている。戦場で負傷した者、戦場で発病した者、特別な戦闘を経験したので教官になったなど生き残った理由はそれぞれある。昭和五十一年頃、統合幕僚長昔の元帥だった鮫島さんは父の友人として弟の結婚式に出て挨拶をしてくれた。彼はインド洋海戦で飛行機と戦艦が正面から戦い戦艦を沈めた飛行機によるあたらしい戦闘を初めて経験した人でもある。父と同じく胸を患い戦線を離脱した山本さんは父の死を知り「戦えず無念だった」と私に手紙を下さった。俳人でもあった西村さんは父と同じ南海封鎖作戦で目を負傷した。鎌倉の和田さんは六十六期会の幹事として最後まで連絡をしてくれていた。

江田島からの親友、中馬兼四と飲み明かしたこの街にはたくさんの思い出があったことだろう。父と十一人の仲間を偲び、ひとり夜の街に出た。

港町は人通りもなく、天橋立観光の団体名の看板だけがホテルの玄関に出ている。昔、この街が海軍でにぎわっていたなど微塵も感じられない。岸壁の母の歌が流れる小さな店に入り、ひとり無口にも酒を飲みホテルに戻る。その帰り道、星が妙に輝いていた、「よく宮津まで来たな」と十二の星が微笑んでいる。

三十五億年前、光合成を行う単細胞の生命が生まれ、その単細胞が結び付き電線にあたる神経細胞が出来た、それが進化してメモリの機能をもつ脳細胞となり情報処理を行うようになり、一億年前によりやく人類が誕生した。その人類がコンピュータを使い、つい最近、広大な宇宙までもかなり正確に認識するようになった。蜂の巣状に幾重にもつらなるグレート・ウォールや暗黒物質の空洞・ボイドの存在までも知るようになった。驚くべきは、生命が長い時間をかけて進化させてきた情報処理機能を大きく向上させる機械・コンピュータを、人類がこの六十年で作ってしまったことである。それが凄まじい勢いで進化発展をしている背景には、哀しいかな戦争がある。

百年前の日本海々戦では無線すらなかったものが、太平洋戦争ではレーダーや暗号解読が勝敗を決するものとなっていた。それは今日のエレキトロニクス技術となり、衛星による偵察やGPS制御技術を使うミサイルなど新しい兵器を生み、今や、美しく輝く星の世界は、コンピュータ・ゲームさながらの戦争を行う舞台となっている。

アジア各国を侵略し、多くの犠牲者を出した「大東亜」のビジョンを是認することは出来ない。しかし、皮肉な事にあの悲惨な戦争の中から原子力やエレキトロニクス産業が生れた。いや、科学技術が戦争の方法を変えたのかも知れない。いずれにしても、あの大きな戦争がエンジンやベルの発明した電気・通信の技術を飛躍的に発展させ、今日のような物心ともに豊かな情報化社会を生み出した。

しかし、どんなに科学が発展しようが、サッカーの選手が攻撃と守備に分かれて、チームの為に戦うように、組織には目的達成のために統一したビジョンが必要になる。企業に「企業理念」や「年度方針スローガン」が必要なように。その本質は組織への信頼と忠誠心であり、それが団結力を高めモチベーションをあげる。ビジョンのない組織は目的を失い弱体化し、裏切りを生むなどして崩壊する。

戦前の軍国主義教育の反動として、忠誠心は戦後教育の世界において封印されてしまった。その教育のもとに育った現在の日本人の多くが、忠誠心を誤りと思ってしまうのは日本社会の「あわれ」である。単細胞の生命ならば許されることも知れない。しかし、組織を形づくって輪廻しながら生きる人間には、心の惑いを制御する「もの」が必要なのだと思口だった宮津の星達が語りかけていた。

平成二十一年十一月